

この録音に少々飽いてきたとき不意に「奥さん、川に流されたんですって？」と、聞きなれた声が背後から響いた。驚いて振り向く。嚇かされた気がして、この野郎と毒づく。

勝手口からニタニタと笑う顔を覗かせているのは、サン・クリーニングの二番目の子倅だ。そんなに愛想がよかつただろうか。それとも俺の不幸をただ喜んでいいのか、見慣れた笑顔が今、なんだか妙に威嚇的で挑んで見える。

「ちょっと無遠慮すぎやしないか……」

馴染みの洗濯屋の亭主が、どうやらフィリップンパブのホステスに生ませた庶子らしく生まれも育ちも日本なのが、どうも苦手意識があった。端正な風貌に嫉妬している訳ではないが、この国を恨んでいるのか、大きな目の深い窪みに無機質の心が宿っていそうで、俺は常日頃この若者を何処か怖く思っていた。ただ判然としない異国の雰囲気だけが際立って身構えてしまうだけかもしれない。

それとも土性骨なのか。

ホステスは実はカンボジア籍だった。母親に似たのか、ハーフの美貌には恵まれなかったものの縮れ毛に圧縮気味の骨相、南方系の相貌には黄金律が備わって顔立ちの良さが、むしろ和風を見出そうとして所在なく凝視することになる。

子供時分から虐められていたと聞かすが、今でも疎外されているのか自信のなさからソワソワし、探りを入れるような上目遣いは挙動不審に拍車をかける。

むろん、悪い男ではないのだろうが……。

「奥さんが亡くなったことニュースにしたって記者が来なかった？」

昨日、家の前の川が氾濫した。

その濁流に飲まれた。

妻が溺死したのだ。

……いや急逝したのは不慮の事故ではなかった、という。

「自然災害の被害者なら、あなたの奥さんを悼むけど、マスコミが喪の最中に、その悲しみを土足で踏み込むような事しちゃ、いけないですよ。それに事故だとも限らないのにニュースになるかな」

その言い回し方がヘラヘラして小馬鹿にしているように聞こえる。

「てめか、ペラペラ喋っているのは。そりゃ、誰の証言だあ」俺はイラっとした。

自殺という風評は死者を貶める。

「吉村さんだよ。あの人、パートの帰りに橋を渡っていて、あんたの家から奥さんが川に飛び込むのを見たって」

妻の牙子が家の勝手口から土手伝いに駆け上がると、そのまま猛烈な流れに向かって落ちていった、と警察に証言した。

水嵩の増した川面の流れは異様に速く、褐色に濁り飴状にゆったりと盛り上がっていた。身体が滑るように、小枝のように抵抗もなく流れた。ただ押し流され駆け抜けて行つた。不意に珈琲色の濁流の底に飲み込まれたかと思うと、また背が浮かんで何度か流木が衝突し、既に人形のようなだった、と生々しく証言した。

「それで警察、消防、自治会、ボランティア総勢百人ぐらいかな、この豪雨と強風の中で奥さんを探し回ってさ、夕方に自衛隊のヘリまで出動して、もう大騒ぎでしょう？」

マスコミが騒ぐのも当然と言わんばかりに、それを嘲笑の対象にしたいのか嬉々として子倅は笑みを隠さない。

真意が分からない。

「でも自殺じゃ、スママセン……で済まないよ」

「なにお、自殺？ うるせえ、自殺じゃねえって言うてるだろ」と怒鳴り返したものの腹から急に力が抜けた。膝が折れて身体がクタクタと床に落ちる。空気の漏れた人形のように、床に倒れ込んだ俺の視覚はクリーニング店のバカ息子の歪んだ横顔がピカソの絵に似て多重的に変形して見える。

自殺じゃねえ、と小声で反駁するも皺涸れて音になってない。誤って激流に飲み込まれた、そうではなければ一体どうしたというのだろう。

自殺なのだろうか……気持ち揺らぐ。